

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

第19回会員大会開催 ハイブリッドで海外含め70人参加

5月21日、「第19回東京YMCA会員大会」が山手コミュニティセンタールームで開催されました。コロナ禍にあつては、志を同じくする会員や職員が年に一度、一堂に会して各種の表彰や活動報告、意見交換などを行う場です。「これから東京YMCAとともに考える」をテーマとした第19回大会も、参加者の間で活発な交流が行われました。



運営委員には 新・再任17人

その幅広い事業・活動の多くには会員が主体的に関わり、さまざまな役割を担うことで「互いを認め合い、高め合う」社会

今年度の会員部運営委員が推挙され、下記の17人が選ばれました。活躍中のボランティアに贈られる「ボランティア・オブ・ザ・イヤー」は、若者の居場所「Liby」(リビー)を長年支えてくださった岸野憲さん、真理さんご夫妻が受賞(13面)。「ユース・ボランティア・オブ・ザ・イヤー」は、各コミュニティセンターでリーダーシップを発揮した4人の若者が受賞し、上田晶平会員部運営委員長より表彰状が贈られました(12面インタビュー)。

会員の在り方 自由に意見を 必要の共有を

第三部は、今大会のテーマに基づく分団討議を実施。従来の会員の在り方や捉え方を変革するこの意義や可能性について自由な意見が交わされました。この4月、東京YMCAはより分りやすい団体となることを目指して、その多岐にわたる事業の再編と組織の改革を行いました。これを受けて、視野を広げ、「会員の裾野を広げていくこと」もまた、YMCAの運動体としての側面の強化につながるのではないかと。そのような認識を持つて今後も議論を重ねていくことが確認されました。

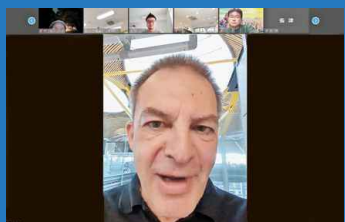


今年度の東京YMCAの事業活動報告が行われました。

第四部では、ウクライナの支援活動の進捗状況が松本数実国際部統括より報告されました。東京YMCAにはウクライナYMCAとの20年にわたる交流の歴史があり、その軌跡も分かち合われ、続いてウクライナYMCAのヴィクター・セルブプロフ総主事がオンラインで登壇。募金への感謝と平和への願いが述べられました(左下記事)。

会を通して、社会の課題にこたえるためのYMCA運動の意義と必要をあらためて共有し、各地での活動推進を約束して閉会となりました。(広報室)

ウクライナYMCA総主事も登壇



ウクライナYMCAのヴィクター・セルブプロフ総主事は、ヨーロッパYMCA同盟の支援を経て現在スペインのマドリッドに避難をしています。ウクライナに残って活動するYMCAスタッフとは日夜連絡を取り合い、さまざまな観点から避難民支援に奔走しています。「第19回東京YMCA会員大会」にもオンラインで登壇し、次のように呼び掛けました。

日本の皆さんとは、子どもたちによるクリスマスカード交換を中心に長年交流が続いていることに感謝をしています。侵攻直後に、日本から真っ先にコンタクトがあったことは、大変嬉しく心強いことでした。皆さんとの強いつながりを、今あらためて感じています。

既に550万人がウクライナから国外に避難をし、国内でも数百万人が移動を余儀なくされています。ウクライナYMCA

は、避難民を助ける活動を継続すると同時に、今後は戦争によって深く傷ついた子どもや若者の心の傷を癒すための働きにも注力したいと考えています。夏には、子どもや若者の心のケアを目的としたキャンプを実施する計画です。

これからも私たちの友情が続いていきますように。ウクライナや日本で直接お会いして、ますます交流を深める日が早く訪れることを願っています。

2022年度会員部運営委員

YMCAの会員を代表して各種活動を企画、運営し、会員増強なども担うのが「会員部運営委員」です。委員は毎年の会員大会で推挙され、任期は一年。今年度は以下の方々に委嘱されました。

【再任12人】

上田 晶平	佐久間春枝	林 正人	本川 悦子
近野 準一	東矢 高明	平山 恵子	蒔田 敏雄
榊原 正人	長谷川あや子	保坂 天蒼	綿引 康司

【新任5人】

大橋めぐみ	藏知 浩	御園生好子
小原史奈子	須田 哲史	

※他に、以下8人の職員が加わり、合計25人で運営してまいります。

大津 桃子	小野 実	小松 康広	堀 雄二
沖 利柯	口原恵美子	波多 啓造	松本 竹弘

【退任9人】

麻生由美子	大輪 匡史	菰渕 光彦
今井 武彦	唐島 悦子	鈴木 雅博
大谷 博愛	小林 文彦	中内 秀子

※任期満了

大輪 匡史	菰渕 光彦
唐島 悦子	鈴木 雅博
小林 文彦	中内 秀子

赤△三角

出身の東北大学YMCA
「献堂式に講話をしてほしい」との依頼があった。2年以上、コロナ禍で過ごす

寮生に何を語ればいいのか▼私が所属する役所の昨年・今年の新入職員は、卒業間際までオンライン授業がほとんどで、学事はことごとく中止となり、人と会うこと、友をつくるのができなかつた。4月から心機一転、仕事を始めたものの、コロナ対応に追われる職場では、先輩や同期に気軽に声を掛けることもできず、5月病ならぬ対面疲れで孤独感を抱えており、メンタル面でのフォローが課題である▼しかし、孤独感こそコロナだから生じたのだろうか▼産業革命を経た1844年のロンドン。劣悪な労働環境やスラム街で、地方農村からやってきた大勢の青少年労働者は希望を失い、孤独を感じていた。そんな中、共に聖書を読み、祈り、心豊かな人生を求めたジョージ・ウィリアムズら12人の若者からYMCAが誕生した▼社会的背景は異なっても、つながり歩み寄り「一匹の羊」のことも見放すまいとするYMCAミッションは、時代を超えて変わることがない。私自身のYMCAとの出会いに、寮生に伝えるメッセージがありそうだ。(評議員 東矢高明)

■職員がイベントに登壇、性別にとらわれず生きるために

5月12日、国際NGOプラン・インターナショナルによる高校生の意識調査に基づくレポート発表記念イベントがオンラインで開催され、東京YMCA高等学院の藤原聖帆職員がパネリストとして登壇しました。

子どもや若者の権利の推進に取り組むプラン・インターナショナルは、日本の高校生2000人を対象に、ジェンダーに基づく固定観念や偏見に関するアンケート調査を実施。この4月、その結果を『性別にとらわれず自由に生きるために～日本の高校生のジェンダー・ステレオタイプ意識調査～』*として発表しました。調査からは、多くの高校生がジェンダーに基づく固定観念や偏見による影響を強く受けていることが明らかとなり、この結果を見つめる機会として開催されたイベントでは4人のパネリストを中心にさまざまな意見が交わされました。

授業の一環として生徒が意識調査に協力したご縁で、イベントにパネリストとして登壇した藤原職員。学校がジェンダーに基づく固定観念や偏見を生み出す現場の一つであることを示す結果を受けて「教育に携わる者としてショックだった」とする一方、「今回の事実が数値にはっきり表れたのは意義深いこと。ジェンダー・ステレオタイプは確かに存在するという現実を受け止め、無意識の再生産を断ち切るためにできること」と呼び掛けました。

高等学院では、2020年度より「ジェンダー入門」が開講。藤原職員は今後も、多様な価値観を認め合い、誰もが生きやすい社会を共に築く機会となるような授業の企画運営を目指します。(広報室)



※レポートは上記QRコードよりダウンロードが可能



村尾昇一氏
東京YMCA
第4代総主事
(在任 1934～38)

シリーズ
資料室の窓から(115)“時”を捉え直した
第4代総主事・村尾昇一

本元元副総主事 齊藤 實

“時”は、人びとの思いを変える。《今》をどう捉えるのか。その判断が“おのれの時”の向きを決める。東京YMCAが“時”を捉え直した」と思われる事例を見ておきたい。関東大震災後の再建を果した1934年経たずの1934年から1935年にかけて東京YMCAは運営機構をたてつぎに2度変えた。この時代、国は大揺れであった。陸軍省は、パンフレット『国防の本義とその強化の提唱』を発行して「軍事大日本帝国拡大」を急いでいた。イエス・キリストの福音伝道を貫くべきキリスト教界もまた揺れていた。1933年11月、日本基督教聯盟は「日本精神を聖化しこれを拡充」

と「非常時局に対する声明書」を採択した。この波乱万丈の時期、東京YMCAで齊藤憲一の後を承けて総主事となった聖公会神学院教授村尾昇一は、1935年1月の『東京青年』に就任の辞で次のように述べ、《今》を捉え直している。「キリスト教会が今のいうには発展を遂げなかった時代の日本では、教会の前衛としての『Y』の任務は重く、またそれを十分に成し遂げてきた。しかし今日においては初期時代のような性質の活動は『Y』の本質でもなかったし、また今日の教会はそれを許そうとは思えない。かくして『Y』は次第に、それ自体の為すべき、恒久的な事業の姿を示してきたのだ。…今日

において『Y』の持つ使命は何であるか。私は社会教育と社会奉仕がそれである」とを信ずるものである。こう述べて、前任者齊藤憲一が1934年1月に事と担当を改めたばかり機構を、ためらうことなく「新た。1935年1月で『少年部』が『少年課』、キャンプは『外営課』というなどであった。Yの機能を十分活用するにあり、と機関誌は報じた。しかし、この村尾時代は3年程で終わる。運営は苦難の時であったと、村尾総主事の下で霊育課長兼経理課長を務めた第6代総主事木本茂三郎はその著「昭和の東京YMCA」に書いた。

思い通りにいかななくても楽しむ

大和 英理加さん (たたみ)/南センター

YMCAのリーダーとなったきっかけは、高校2年生のときに「野尻CIT (カウンセラー・イン・トレーニング) キャンプ」に参加したこと。小学生の頃から参加者として純粋にキャンプを楽しんできましたが、リーダーとしての“いろは”や心構えを実地で学ぶ機会を経て初めて、リーダーがいかに広い視野で行動しているのかに気づかされました。CITキャンプでは、同時期に開催される実際の小学生キャンプのグループに「リーダー見習い」の形で関わるチャンスがあります。その際、グループの子ども一人ひとりに配慮しながら、高校生の私へのフォローも欠かさないリーダーの頼もしさに触れ、大きな影響を受けました。

大学生の4年間は、小学生の野外グループ活動に関わりながら、シーズンキャンプにも参加しました。新型コロナの影響を受けて、思い通りに活動できない状況に何度も直面しましたが、最近になって思うようになったことがあります。それは、「思い通りにいかない」ことは、コロナがあらうとなかろうと、人生においてよくあることだということ。だから、そのときある環境や条件で、そこにいる人たちで、できることを大事にしていきたいと思います。

3歳の時に基礎保育クラスに参加をして以来、YMCAのリーダーやスタッフに見守られて育ちました。そして今、自分も誰かの成長を見守る側に変えられていることに気づき喜びを感じています。



「どんな状況でも楽しむことが大切にしたい」、と大和さん

ベテラン
ボランティア
も大活躍!

【表彰】2021 Volunteer of the Year

絶妙な距離感で

岸野 憲さん・眞理さん

「憲さんが船の仕事で家を空けることが多かったし、うちの子どもはみんなYMCAに育ててもらったのよ」。お子さんが山手センターの水泳クラスに通うようになって以来、YMCAとのつながりを深めてこられた眞理さんは笑顔でおっしゃいます。



岸野憲さん、眞理さんとYMCAとの関係は、“liby”を抜きにして語ることはできません。子どもや若者の居場所であるlibyが新宿区中落合を拠点としていた頃から、眞理さんはご飯づくりのボランティアを担い、その後7年間ご自宅の一階をlibyの新居として提供してくださいました。

libyにとって、岸野さんご夫妻は、まさに理想の大家さん。格安の家賃で居場所を与え、時おり様子を見に降りてきては差し入れをし、ボランティアも続け、「付かず離れず」の絶妙な距離を保ちながらlibyを支えてくださいました。中でも思い出深いエピソードは、libyがお休みの土曜日に、突然訪れたメンバーのKさんを迷わず迎え入れてくださったこと。さまざまな事情から「うまくいかなさ」を抱えて、その日も先輩と朝まで遊んだ後、突然車から降ろされ困り果てたKさんは、ついつい歩いてlibyまで来てしまいました。そんなKさんに、眞理さんは「落ち着くまでいていいよ」と声を掛け、ご飯を食べさせ、何時間も寄り添ってくださいました。



ご自宅の一階を子どもや若者の居場所として提供

Kさんの繊細な気持ちを受け止めて、叱る代わりにご飯を食べさせ、取返す家の少し手前で車を止めて見送ってくれた眞理さんの優しさを、Kさんが忘れることはないでしょう。水泳クラスからはじまったYMCAと岸野家の物語は、これからも続いていくのだと信じています。

高等学院 井口 真 (元libyスタッフ)

とにかくいろんな人に声を掛けた

前澤 佐帆さん (ぼむ)/山手センター

小・中・高とYMCAのキャンプで育った私は、大学生になってごく自然の流れでボランティアリーダーになりました。小学生を対象とする月1回の野外グループ活動「アドベンチャークラブ」には、4年間関わり続けています。特に大変だったことは、新型コロナの影響を受けて、一緒に活動するリーダーの数がいつか4人にまで減ったこと。1人のリーダーと4～6人の子どもでグループ活動をする「アドベンチャークラブ」は、最低でも10人のリーダーがいなければ成り立ちません。見通しが立たないことが続き、苦しい状況にありましたが、「自分が諦めたら活動が立ち行かなくなってしまう」、そんな使命感を持ってとにかくリーダー集めに奔走しました。



今夏のキャンプにもリーダーとして参加予定の前澤さん

活動の頻度は月に一回ですが、リーダーたちは事前に最低でも4回は集まって当日に備えます。活動毎にテーマや目標を設けて、具体的な内容や活動場所を決め、その場所がテーマに相応しいかを確認するため下見にも出掛けます。対面での話し合いが難しくなってからは、ズームを活用し、作業と最終確認だけ短時間で集まって一気に行う方法をとっていました。現在も、感染状況を確認しながら、その都度グループの数や内容などを検討しています。嬉しいことに、新しいリーダーが一人また一人と加わり、今は14人の仲間と共に活動することができています。子どもたちの中からも、いつか自分に続いてくれるリーダーが現われたら……。そう密かに願っています。

“ステキなもの”が生まれる不思議

辻井 友葉さん (タートル)/西東京センター

ツイッターで知り合った大学の先輩から誘いを受けて何となく足を踏み入れたYMCA。気づいたら、実家のようにいつでも安心して帰って来られる自分の居場所になっていました。

初めて参加をしたのは、「あおぞら」「シャベルズ」と呼ばれる知的障がい児の活動です。見るもの聞くものすべてが新しく、以来障がい児の野外活動を中心に、小学生の定例活動やシーズンキャンプにも参加。大学の4年間で夢中になって走り続けました。

繰り返し考えたことは、「どうしても相手にきちんと思いを届けられるか」ということ。特に子どもたちには、安全面の注意などを含め「リーダー」として伝えたいこと、伝えなければならないことがたくさんありました。月に一度の活動で怒ってばかりいては勿体ない。一回一回を、楽しい思い出深い時間にするために、例えば掛け声を決めたり、質問を投げかけてみたりと、いろいろと試しながらコミュニケーションを工夫しました。

トライ＆エラーの連続でも、一年が経つ頃には変化を実感するようになります。例えば、活動の何気ない歌を歌う場面で、当初は歌うことを拒んでいた子どもたちが、あたり前のように一緒に歌うようになっていくことにふと気づいた瞬間、涙が溢れそうになりました。なかなか言葉では表現し難いのですが、「ステキなもの」が確かに生まれた手ごたえを感じました。

【表彰】2021 Youth Volunteer of the Year

YMCAの
ユースパワー

YMCAの活動の特徴の一つに、子どもたちと一緒に活動を楽しむ学生ボランティア (YMCAでは「ボランティアリーダー」、通称「リーダー」) の存在が挙げられます。彼らは、YMCAの野外活動やキャンプ、障がい児・者プログラムなどで企画から準備、当日の引率や運営までを担い、子どもたちに近い「ナナメの関係」でその成長を見守ります。今年の「ユース・ボランティア・オブ・ザ・イヤー」として会員大会で表彰を受けた4人のリーダーに、活動にかける思いを伺いました。

(広報室)

先輩から渡されたバトン

菅原 唯さん (ぴお)/江東センター

小学生のとき、江東コミュニティセンターの野外グループ活動「どろんこ」に参加していました。その時お世話になったリーダーがとても魅力的な人で、「私もいつか彼女のように成長したい」、そんな思いをずっと抱いてきました。折に触れて連絡を取り続けてきた彼女から「あなたもやってみないか」と大学生になったタイミングで声を掛けてもらい、迷わず「はい!」と答えたのが4年前。以来、私もリーダーとしてさまざまな経験を重ねてきました。

東京YMCAの代表として「全国リーダー研修会」に参加したことは、特に印象に残っています。YMCAでボランティア活動をする学生が全国から集い切磋琢磨する場として毎年開催されるこの研修会も、新型コロナウイルスの影響を受けて昨年はオンラインでの実施となりました。「所謂“ネガティブなもの”を抱えた状態に“X”を掛けると、“ポジティブ”な社会になる。この“X”とは何か。研修会の冒頭で投げかけられた問いに、私たちは2カ月半かけて必死で向き合いました。一緒にこの難問と向き合った、福岡や栃木に住むグループのメンバーとは、結局最後まで一度も「対面」することはありませんでした。それでも、週に何度も「ズームで会う」約束をして、心行くまで話し合い、生きる上での指針を分かち合うこととなった「生涯の友」とは、今でも日常的に連絡を取り合っています。

私がYMCAで得たのは、人とのつながりです。人とつながる尊さを教えてくれた先輩から託されたバトンを、私もこれから身近な人につないでいきたいと思います。



ぴお

「キャンプソングを歌う楽しさを忘れないで」、と菅原さん。子どもたちに
向けてYouTube配信



大学生最後のキャンプで「豪胆」という言葉を贈られた辻井さん(右端)